

【審査論文】

『紙文夾』『浦紅葉』歌仙分析

佐藤 勝明

An analysis of Kamibasami

SATO Katsuki

要旨

元禄期の俳諧の内実を探るために、蕉風以外の未注釈文献から興味深い連句作品を選び、「見込」「趣向」「句作」の三段階分析の手法を用いて、各付合のありようを分析する。本稿はその第一弾であり、無倫編『諧紙文夾』(元禄十年秋序)に収められる、不角・無倫・里風・我笑・和英による五吟歌仙を対象とする。そして、その分析により、当歌仙でも心付(句意付)が主流となつていくことは確実ながら、前句にふさわしい場面を想像し、位を重視して付けるといふ芭蕉流の意識を見て取ることはできず、詞の連想に頼つた側面も少なからずあることを明らかにする。

キーワード… 俳諧・元禄期・連句・無倫・紙文夾

元禄時代の俳諧が蕉風一辺倒ではなく、数多の宗匠・点者たちで俳壇が群雄割拠の相を呈していたことも、すでによく知られる通り。それを総体としてとらえるための「元禄俳諧」という術語も、俳諧研究の世界では普及して久しいものの、作品の解明までが格段に進んだわけではない。そうした状況への反省から、未注釈の連句作品を選び、評釈・分析していくことを思い立つた。その第一弾として、今回は、無倫編『諧紙文夾』(元禄十年秋序)に収められる、不角・無倫・里風・我笑・和英による五吟歌仙を対象とする。同

書は、無倫が一座した歌仙四巻などを収める江戸の俳書で、連衆には江戸を代表する調和・山夕・立志・艶士・不角らが名を揃えるほか、蕉門の嵐雪の参加も見られて、興味をそそられる。上下二冊からなり(当該歌仙は下巻所収)、上巻は天理図書館綿屋文庫他蔵、下巻は早稲田大学図書館雲英文庫蔵。編者の無倫は江戸本材木町に住む俳諧師で、志村氏。享保八年(一七二三)に六十九歳で没するので、元禄十年(一六九七)はその四十三歳に当たる。当興行の主賓たる不角は、俳諧師のほかに書肆も営む立羽定之助で、この時

は三十六歳。和英は調和の養子となつてその俳系を継いだ人。里風号の人は複数いて詳細は不明ながら、ここは蘭台・無倫・艶士らの興行にたびたび参加する里風と見て間違いなく、不角の撰集にも入集するほか、元禄十七年・宝永二年には自ら歳旦帖を出している。我笑号も複数の人がいる中、ここは無倫・艶士らの周辺にいた人とおぼしい。芭蕉が没して三年、不角・無倫に調和門の和英という、江戸の非蕉門系では主力級の人々が顔を合わせ、果たしていかなる俳諧を行なっているのかが、この歌仙に対する主たる関心事になる。各付合の分析にあつては、①作者は前句をどう理解し、とくにどの点に着目したか〔見込〕、②その見込に基づき、この句ではどのような場面・情景・人物像などを描こうと考えたか〔趣向〕、③その趣向に従い、どのような素材・表現を選んで一句にまとめたか〔句作〕、という三段階による分析方法を用いる。底本には『江戸書物の世界』（笠間書院 平成22年刊）所収の翻刻本文を用い、雲英文庫蔵本を参照した。句の掲出にあつては、原典に忠実であることを第一義としつつ、字体は通行のものに統一し、濁点と振り仮名（カナは原典にある通り）を私に付した。

歌仙

浦紅葉半分淋し秋の暮

不角

発句 秋九月（紅葉・秋の暮） 水辺体・植物木・夜分

〔句意〕秋も深まりゆく夕暮の浦辺には、紅葉の赤がきわだつて、これを定家になぞらえて言えば、半分だけさびしいということになる。

〔備考〕「浦紅葉」は「浦の紅葉」を縮約した表現らしく、海（ないし湖）の入江あたりに見られる紅葉ということ、〔紅葉〕は諸書に九月の扱ひ。この措辞は、藤原定家「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」（『新古今集』）を踏まえるに相違なく、定家が花も紅葉もないことをもって、

浦辺の秋夕に独自の閑寂味を見いだしたのに対し、自分の見る景観には紅葉があるから、淋しみの味わいも半分引かれるのだとする。と同時に、これは、片面だけが赤い「裏紅葉」の意を掛けた洒落なのでもあろう。俳諧における「秋の暮」は、秋の夕暮の意にも暮秋の意にも用い、両意を兼ねて詠まれることも少なくない。この場合、定家歌との関係から、「秋の夕暮」の意味であることは当然ながら、紅葉との兼ね合いにより、時節が秋の終わり近くであることの含意もあると見ておく。

千鳥雁金遊ぐ海士が子

無倫

脇 秋九月（雁金） 生類鳥・水辺用・人倫

〔句意〕千鳥や雁とともに、漁師の子たちも泳いでいる。

〔付合〕①前句が浦辺の紅葉を詠んだことに着目し、②紅葉と連想関係にある雁を想起しながら、その時分の浦で見られそうな光景を探り、③千鳥や雁が泳ぎ、海士の子もまた泳ぐとした。

〔備考〕「千鳥」は、チドリ科の鳥と特定すれば冬の季詞、多数の鳥をさす一般語と見れば雑の扱ひになり、詩歌に詠まれた千鳥がそのいずれになるかの分別は難しい。ここは発句に合わせて秋季たるべきところであるから、後者と見ておく。「雁金」は「雁が音」に同じく、本来は雁の鳴き声をさし、転じて雁そのものをさすことも多く、諸書に九月の扱ひ。多くはマガンをさし、日本には秋に渡来し、湖沼や湾などに群生して、春に北方へ帰る。「海士」は海や湖で漁業に従事する人で、「浦」とは密接な連想関係にある。その子どもであるから、水の冷たさには慣れていて、秋の終わりころでも平然と泳ぐとしたものか。「紅葉」と「雁」は連想関係（『類船集』に「紅葉↓雁」雁↓紅葉）。「海士」は「浦の苫屋」からの連想（そこには謡曲「松風」の詞章が介在しているかもしれない）であると同時に、成語「天津雁金」から「天

との音通で導き出された可能性も高い。

あまそぎあふなくの月影に

里風

第三 秋八月ないし三秋（月影） 月の句 降物・天象・夜分

〔句意〕 雨だれが落ち、月影も危なっかしいさまであつて。

〔付合〕 ①前句の雁金を飛翔する雁と見換え、②海士と同音の雨を想起しつつ、雁に付き物の月を思い寄せ、③雨に危なげな風情の月と雁であるとした。

〔備考〕 「あまそぎ」は「雨注ぎ」で、「雨だれや霧雨をさし、和歌では軒端に落ちる水滴を詠むことが多い。ここは、前句の「海士」との音通から導かれたのであろうし、歌題に「雲間雁」「雨中雁」などがあることも、この句で雨を出す一因かもしれない。「雁」と「月」は付合語の関係（『類船集』に「雁↓月」。「あふなく」は形容詞「危なし」の語幹を重ねたもので、副詞としておそるおそるの意になる一方、危ないことを強調する表現でもある。あるいは、分相応の意をもつ「あふなあふな」（両語は語源を等しくするととも言われる）を掛けているのかもしれない（木村尚志氏の教示）。

弓の極意は引ず放す

我笑

初才4 雑

〔句意〕 弓を射る際の奥義は、弦を引くことも矢を放つこともしないことだ。

〔付合〕 ①前句を誰かが霧中でおそるおそる行動していると見換え、②月から弓を想起し、危なげに弓を射ようとする者とこれに注意を与える者を想定して、③弓の秘訣は引かず放たずだという、教訓的な言辞で一句にした。

〔備考〕 この付合は、「月」を「弓」に見立てる常套的な発想（『類船集』に「月↑弓」）に多くをよつていよう。「極意」は学問や技芸で核心を突く重要なこととがら。「引ず放す」は、謡曲「放下僧」の「引かぬ弓、はなさぬ矢にて射

る時は、当らずしかも外さざりけり」を踏まえるとおぼしく、この元にある仏国禅師の和歌「公案提撕の心を／たてぬまとひかぬ弓にてはなつ矢はあたらずながらはづれざりけり」（『仏国禅師集』）が禅の公案に通じるものであつたように、本来これは悟人の境地を暗示するものであつた。しかし、ここでは、未熟な腕で引くよりは引かない方がましだという、一種の揶揄めいた言と見た方がよく、それは前句の「あふなく」を危うげな手つきと見込んでのことと考えられる。

敷島の国いよやかに撫民体

和英

初才5 雑

〔句意〕 日本はたしかに民を安心させる国のありようだ。

〔付合〕 ①前句を不戦の教えを言ったものと見て取り、②よく治まっていさかいのない社会を想定し、③日本国で民が安寧に暮らすのは明らかだとした。

〔備考〕 「敷島の」は「大和」に掛かる枕詞で、転じて大和国や広く日本国をさす。ここでの「敷島の国」も、日本という国を大きく表しているように見よう。 「いよやか」は樹木などが高くそびえ立つさまから、厳かなりようを表す語で、さらに物事が明確なことをもさす。「撫民」は為政者が国をしつかり治め民をいたわること、「……体」はそのようなさまであること。歌論用語に「○○体」があり、「敷島の道」が和歌をさすという知識も、一句の措辞を定める上で、作者の脳裡にあつたことかもしれない。

楊枝六寸尺の白箸

執筆

初才6 雑

〔句意〕 楊枝は六寸の長さがあり、白箸も何尺という長さである。

〔付合〕 ①前句で国がよく治まっているという点に着目し、②そのことを何

か身近なもので表そうと考え、地獄・極楽での箸の逸話を思い寄せて、③人々が使う楊枝も箸も非常に長いとした。

〔備考〕「楊枝」は齒の掃除をするための細く短い木の棒で、「白箸」は木地のまま漆などを塗っていない白木の箸。「六寸」は約十八センチ、「尺」は約三十センチの長さ(こは「尺の」で何尺かの長さがあることを表している)であるから、「楊枝六寸」も「尺の白箸」も現実的なものではない。こは、極楽では三尺もの長箸で互いに食べさせ合うとされる民間伝承を踏まえ、さらに楊枝を加えて、前句の治国ぶりを強調したのであろう。

よめ
の代になる 標ゆづりや大根カミミナサ

無倫

初ウ1 春一月(標・大根) 人倫・植物木・植物草

〔句意〕財産の譲与もすんで嫁の代となった正月、標や大根が飾られている。〔付合〕①前句の白箸を雑煮箸と見込みつつ、長い楊枝や白箸を實用とは別の縁起物と見て、②正月に何かめでたいことが重なった家を想像し、③若い世代に家産が譲られた家では、正月の飾り物もめでたげであるとした。

〔備考〕ここでの「姫(嫁)の代になる」は、舅・姑が隠居して息子が家長となり、その妻が家計の実権を握るようになったということ。「標」はトウダイグサ科の常緑高木で、新葉・旧葉の交代が目立つところからこの名が付いたという。これが新年や祝事の飾り物に用いられるのも、交代(たとえば財産の移譲)という象徴的意味を認められてきたからにほかならず、こでも「標」には「譲り」の意が掛けられている。「かがみぐさ(鏡草)」は元日の宮中で鏡餅の上に置いた輪切り大根のことで、大根そのものをもさす。

ほとけ
仏を客に芳順はうじゆんが節セツ

不角

初ウ2 春一月(節||節振舞) 釈教・人倫

〔句意〕芳順の家の節振舞は仏様を迎えて行なわれる。

〔付合〕①前句を先代の死去に伴う世代交代と見込み、正月の飾りを詠んだことにも着目して、②新年の行事で評判になったものはないかと探り、③芳順家では仏を客として節の振舞が盛大になされるとした。

〔備考〕「仏」は仏陀や仏像のほか、死者・僧侶・仏教徒から慈悲深い人やお人よしまでをさす語。「芳順」は吉原遊廓で遊女屋を営む山本芳順(芳潤とも)のことらしく、承応・明暦のころ、太夫の勝山が風呂屋女からその抱えとなつて全盛を誇つたことは、『色道大鏡』などに記されて著名。「節」は季節の変わり目の行事のことで、こは式目的に春季であるべきことから、正月に馳走をする節振舞のことと見られる。「芳順が節」は未詳ながら、世間でも話題となるような節の振舞が盛大に行なわれたとおぼしく、それは亡くなった先代などの供養のためであつたかもしれない。

うすがすみくわとくち
薄霞瓦焼口から富士見えて

我笑

初ウ3 三春(薄霞) 簞物・居所・山類・名所

〔句意〕火灯口からは、薄く霞がたなびく向こうに富士山が見えていて。

〔付合〕①前句を芳順なる風流人が好人物を集めての振舞と見換え、②気の良い人を集めての茶会を想定しつつ、そこから見える気持ちのよい景観は何かと探り、③薄霞がたなびき、茶室の入口からは富士も見えたとした。

〔備考〕「瓦焼口」は未詳。「瓦焼」は瓦を焼くことであるから、その窯の燃やし口をさすという考え方も、一応はありえよう。しかし、それでは前句とのつながりが説明できず、こは「火灯口(瓦灯口)」のことかと推察される。「火灯口」は家の壁などに設ける火灯形(上が狭く下が広がった方形)の出入り口のことで、とくに茶室の出入り口をいう場合が多い。

鵜みさしのかけるあたらすばしり鮭

里風

初ウ4 雑 生類鳥・生類魚

〔句意〕 かわいそうに、ミサゴがボラの稚魚を捕えている。

〔付合〕 ①前句の富士を茶室から眺める遠景と見定め、②その近景には海が広がっていると考え、ここから目にできるであろう光景を探り、③鮭ぼらの稚魚が惜しくも雉鳩みさじに捕まったとした。

〔備考〕 「鵜」は、「鵜鮭集」という用例（文化十五年の土由編『美佐古鮭』の内題）から推して、ワシタカ科の鳥である雉鳩をさすと見られる。「かける」には獣・鳥・魚などを捕える意味があり、ここは鵜が鮭を捕獲したということであろう。「鮭」は「洲走」に同じく、出世魚とされる鱈の稚魚の称で、体長五〜十センチ程度のをさすという。「あたら」は惜しいことにの意で、ここは小魚が鳥に捕まったことを受け、まだ幼い命なのにと大げさに言ったわけである。雉鳩も鱈も元禄ころの歳時記類には記載がない。

安徳あんどくの入水いみずい湊ミクツの綾錦あやにしき

不角

初ウ5 雑 人倫・水辺用・衣類

〔句意〕 安徳天皇が入水されて、華麗な衣装のまま海の水屑となった。

〔付合〕 ①前句を海辺における生命の争いと見て、②海辺でくり広げられた人の争いとして源平の合戦を想起した上で、平家終焉の場面を思い浮かべ、③安徳は綾錦のまま入水して水屑になったとした。

〔備考〕 「安徳」は八十一代の安徳天皇。高倉天皇の第一皇子であり、清盛の娘徳子を母として生まれ、三歳で即位したものの、平家の滅亡と命運をともし、壇ノ浦の海に沈んで八年の生涯を閉じる。「湊」は屑・澱などをさす字で、『書言字考節用集』等にはミクツの読みがある。「水屑」は水中のごみをさし、はかない命をたとえるのに用いられ、ここは『平家物語』「先帝

身投」に「いまだ十歳のうちにして、底の水屑とならせ給ふ」とあるのを受ける。「綾錦」は美しい衣服をいう語で、安徳の着ていた美装をさす。

篝かきりは炭に月も宵闇よいぢみ

和英

初ウ6 秋八月ないし三秋（月） 月の句 天象・夜分

〔句意〕 篝火の材は炭となって消え、月もまだ出ない宵闇である。

〔付合〕 ①前句が安徳入水の一件を扱ったことを受けとめ、②その際のあたりの様相を想像し、平家の命運と同じくその夜は暗かったであろうと考え、③宵闇に篝火も消えてあたりは暗いとした。

〔備考〕 「篝」は鉄製の籠に松材を盛って燃やす火のことで、夜の照明に用いる。ここはその松材が炭になり、灯りが消えたということ。「宵闇」は満月以後の十六日から二十日ころ、月の出が遅いため宵の間が暗いこと。『類船集』に「篝火↓月遅き夜」が付合語として記載される。ちなみに、壇ノ浦での平家滅亡は三月二十四日であったのを、ここでは秋季に取りなしている。

山寺の門田かどたの鳴子筆なるこの軸

里風

初ウ7 秋八月（鳴子） 釈教

〔句意〕 山寺の門の近くにある田では筆の軸で鳴子を作り設けている。

〔付合〕 ①前句の篝を鳥獣よけのためと見換え、②収穫を間近にした田園風景を想定し、鳥獣に荒らされないための別の別の工夫は何かと考え、③山寺の前の田では鳴子が筆の軸で作ってあるとした。

〔備考〕 「門田」は門の近くにある田。「鳴子」は鳥獣による農作物の被害を防ぐための仕掛で、『毛吹草』等の諸書に八月の扱ひ。短い竹筒を板に掛け連ね、付けた縄や綱を引いて鳴らすのであり、ここではその筒の代わりに古い筆の軸を用いているわけである。

傘の庵に蔦の這ふ迄

無倫

初ウ8 秋八月(蔦) 居所・植物草

〔句意〕傘の形の庵に蔦が這いまつわるほど、ここでの暮らしも長くなった。
 〔付合〕①前句を山奥で自給自足する寺と見込み、②住職は土地に根付いてひっそり暮らすと考え、③傘のような庵に蔦が這うまでになっているとした。
 〔備考〕「傘の」は傘や笠のような形状をしていること(「傘」と「笠」は通用)で、ここは小さな庵が屋根にすつかり覆われた恰好であることを表している。なお、筆の先端にかぶせる鞘を笠ともいい(『類船集』に「笠↓筆」)、この付合にはそうした詞の連想が介在していると思われる。「蔦」はブドウ科の落葉性つる植物で、『はなひ草』等の諸書に八月の扱ひ。

元服の髪を握ッてさむる恋

和英

初ウ9 雑 恋(さむる恋)

〔句意〕元服をした者の剃った髪を握ッては、恋もすつかり冷めてしまう。
 〔付合〕①前句を隠棲する道心者の住居と見換え、②そうした人には性愛の対象となる美少年がいるはずと考え、その恋の終わる場面へと想像を進め、③前髪を落とした元服後の姿には恋も冷めてしまうとした。

〔備考〕「元服」は主として男子の成人の儀式をいい、十五・六歳ころに行なうことが多く、これ以後は前髪や月代を剃り落とすのが習い。元服する前の少年は広く若衆と呼ばれる一方、「若衆」は衆道(男色の性愛)の対象となる美少年をさす語でもあり、前髪は若衆の美の象徴ともされていた。「寺」と「若衆」が付合語であるように(『類船集』に「若衆↓寺」「寺↓若衆」)、僧侶と衆道の縁は深く、ここでも(庵住↓道心者↓衆道)という連想が働いていることは間違いない。その意味で、打越の「山寺」(『類船集』に「山寺↓児」)から三句がらみの気味も感得される。

見ぬ色専ふかき勾当

我笑

初ウ10 雑 恋(色…ふかき) 人倫

〔句意〕相手の容姿が見えないため、いっそう色欲をつのらせる勾当である。
 〔付合〕①前句を元服後の髪をさわって恋情を冷ましているものと見定め、②それを若衆が好き盲人ゆえの行為ととらえ、その人の好色ぶりを描こうとして、③なまじ見えないために勾当はますます情欲を深くするとした。
 〔備考〕「色」は色彩のほかには容貌や愛情なども表す語で、「色深し」には色欲が強いという意味があり、ここでも容姿と情欲の両意で働いている。「専」はモハラ・タクメなどとも読み、専一に集中することを表す字で、『書言字考節用集』等にはイトドの音がある。「いとど」は程度がさらにはなはだしさまを表す副詞。「勾当」は盲人の官職で、検校・別当の下で座頭の上位に当たる。髪を握ッたのを盲人ゆえと見たのであり、ここに一種の理屈が認められる。また、五感の一が欠如すると他が敏感になるとされ、それが色情にも関連するとの俗説も、この付合を成り立たせる要因の一つであろう。

名所香片座は花の吉野方

無倫

初ウ11 春三月(花) 花の句 芸能・名所

〔句意〕名所香の片側は吉野にちなむ桜花の座である。
 〔付合〕①前句を目に見えない趣を探る意と取りなし、②それは鼻で当てる香であろうと考え、花の定座であることも考慮しつつ、組香の場を想像して、③名所香の片座は花の吉野方であるとした。
 〔備考〕「名所香」は香道における組香(ある主題に沿って複数の香木をたき、その香を言い当てること)の一つ。盤上に桜と紅葉の立物(造り物)を立て、香を当てたらそれを動かして勝負を競うというもので、これは、桜の名所である吉野と紅葉の名所である龍田の争いをかたどってもいた。「片座」

は片方の座ということで、ヘンザの読みが知られる用例(『海道記』等)はあるものの、ここは組香を競う二座の片方ということであるから、カタザと読んでよいと判断する。「花の吉野」は桜花の名所である吉野山ということ。「方」は接尾辞的な用法で、ある一方の側をさし、ここは名所香の一方が桜の立物を使うことをさす。ただ事実そのままの一句であり、付合もへ見ぬ↓嗅覚↓香道↓という連想によったままで、ひねりには乏しい。

屠蘇呑負て水を罰盃とそのみまげ

不角

初ウ12 春一月(屠蘇) 食物

〔句意〕屠蘇酒を飲む競争に負けて、水を罰杯として飲む。

〔付合〕①前句が名所香という勝負を扱ったことに着目し、②負けた側には罰があるとして罰杯を想起しつつ、前句とは別の酒を飲み合う勝負に連想が及び、③屠蘇を飲む勝負に敗れた罰は水を飲むことであるとした。

〔備考〕「屠蘇」は漢方薬の屠蘇散を酒や味醂にひたし、元日の祝儀に飲む薬酒。一般的な「罰盃」は、罰として無理に酒を飲ませることをいい、詩歌を作る才などを競って敗れた者に飲ませる場合が多い。

白無垢に木綿を沙弥しろむくの着初きせはじめ

我笑

名才1 春一月(着初) 衣類・釈教・人倫

〔句意〕真っ白い下着に木綿物を身に付けるのが沙弥の着衣始である。

〔付合〕①前句を民間に多く見られる正月の光景と見て、②同じ時期に行なわれる行事として着衣始を思い起こしつつ、一般とは別で修行に励む人のありようを想像し、③沙弥の着衣始は白無垢に木綿の衣を着ることとした。

〔備考〕「白無垢」は染めていない白の反物やそれを使って縫った着物をいい、ここは白い絹による下着。「木綿」は「木綿物」のことで、木綿の糸で織つ

た衣類をさす。「沙弥」は仏門に入って修行をする未熟な僧。「着初」は「着衣始」に同じく、正月三が日の吉日を選び、新しい着物を着る儀式。

降り年告る神の啼猿ふりねつぐ

里風

名才2 雑 神祇・生類獣

〔句意〕猿が鳴いて今年は降り年であるという神の告げを伝える。

〔付合〕①前句の身なりを潔斎の一環と見て、②民の困窮を救おうと修行者が神意を伺う場面を想定し、③神の使いである猿が鳴いて、早魃を救う降り年になることを告げるとした。

〔備考〕「降り年」は未詳ながら、雨がよく降る年のことであろう。「啼猿」は鳴き声を上げている猿のことで、テイエンという読みも知られるところながら、ここはナキザルと訓に読んでおきたい。その鳴き声を神のお告げと見たのであり、猿を神としてあがめる信仰も古くからある一方、比叡山と習合する近江の日吉大社や各地の日吉神社・日枝神社では猿が神使とされる。

早乙女の早歌御製に節付さおとめ

不角

名才3 夏五月(早乙女) 人倫・芸能

〔句意〕早乙女たちは御製歌に節を付けて早歌にしている。

〔付合〕①前句から豊年の約束といったことを感じ取り、②そのことを信じて田植に精を出すさまを想像し、そこには神意にもつながる何か特殊な要素があるはずと考え、③早乙女の早歌は御製に節を付けたものであるとした。

〔備考〕「早乙女」は田植をする少女らのことで、本来は田の神に奉仕する特定の女性をさしたとされる。「早歌」は中世歌謡である宴曲の別称で、少し早い拍子で演じたことによる命名。ここはテンポよく歌われる田植歌をさすとおぼしく、「早歌」の語の選択には、「早乙女」の「早」からの連想も

あろう。「御製」は天皇が詠んだ和歌や詩文。

笠おうへいな毛唐人共けとうじんども

和英

名才4 雑 人倫

〔句意〕笠をかぶったまま横柄な態度の外国人たちである。

〔付合〕①前句を特別な客に対して演じられる芸能と見定め、②へ早乙女↓笠↓唐人◇という連想により、その客として外国人を思い寄せ、どのような態度であろうかと想像し、③笠も取らずに無礼な毛唐人であるとした。

〔備考〕「田植歌」は田植の場における労働歌であると同時に、多分に芸能化して演じられるものでもあった。「おうへい」は「横柄」で、奢った態度をとり無礼であること。「毛唐人」は外国人を卑しめている語。ここは長崎の商館に居留するオランダ人や朝鮮通信使などが想定されるところで、將軍への拜謁のため、オランダ商館長らが江戸に赴いた際のもてなしを想像したものかもしれない。なお、七句を隔てるとはいえ、「傘」と「笠」の重出は、不用意のそしりを免れないであろう。「早乙女」も「唐人」も「笠」と連想関係にある（『類船集』に「笠↓早乙女・唐人」）。

日光山たばこを賣る面めんや有ある

里風

名才5 雑 名所・山類

〔句意〕日光山でも煙草をねだるとは、どの面めんを下げてのことなのか。

〔付合〕①前句の外国人を朝鮮通信使と見定め、②その横柄さの一端を具体的に描こうと考え、通信使は日光にも寄ったことを思い起こし、③家康ゆかりの日光でも煙草をほしがるのは実に面の皮が厚いとした。

〔備考〕「日光山」は現在の栃木県日光市にある輪王寺の山号であるとともに、男体山を中心とする山岳群の総称でもあり、家康を祀る東照宮がある地であ

ることも含意する。最初は二荒山と呼ばれ、後に日光と改まったものであり、語呂の面からもニコウザンと読んでおきたい。朝鮮通信使の旅程では、江戸の後に日光に行ったことが知られている。「賣る」は強く求めるの意が相当しよう。「面」には音読符があり、メンと読ませることが知られるも、意味上は、相手の厚かましさを非難するツラのニュアンスを看取すべきところ。「や有」の係り結びも反語の意で、やはり非難を込めた表現と見られる。

立ちながらたち 図ずス飛鳥雲水ひしやうくもみづ

無倫

名才6 雑 生類鳥

〔句意〕立ったままの姿勢で飛ぶ鳥や雲・水などを描いている。

〔付合〕①前句を日光社参の際の出来事と見換え、②気ままな要求をするのはお付きの絵師であろうと考え、その人の作画の様子を想像して、③立ったまま飛鳥・雲水を描いているとした。

〔備考〕徳川の歴代將軍は家康の命日（四月十七日）に東照宮を参拝する習いがあり、その様子を描いた社参図が多く残るので、画家も同行していたと見られる。「図ス」は絵に描くこと。「飛鳥」には音読符、「雲水」には訓読符があるので、ヒチヨウ・クモミズと読む。「飛鳥」は飛ぶ鳥のことで、「雲水」は雲や水など。いずれも自由な動きを本領とするものであり、それらは、描く対象であると同時に、描く主体のありようをも表象しているよう。

雪獅子ゆきじしの風かぜにをのれを吹破ふきやぶり

和英

名才7 冬十一月（雪獅子） 降物

〔句意〕雪で作った獅子が風に吹かれ、己の姿を崩しつつある。

〔付合〕①前句から自然を愛して興の向くままに行動するさまを見て取り、②「雲↓雪」の連想を介し、童心のまま雪像を作って遊ぶさまを想像しつつ、

その像のはかなさも思いやり、③雪の獅子が風に吹き削られているとした。
 「備考」 「雪獅子」は雪を固めて作る獅子の像。雪まるげ・雪仏・雪達磨などと同類の雪遊びで、諸書に十一月の扱ひ。「雲」「雪」「風」は相互に密接な関係（『類船集』に「雪↓雲・たゆむ山風」「風↓雲」「雲↓雪」）。

酒の諫を生酔のいふ

我笑

名才8 雑 食物

「句意」自分もかなり酔った者が、酒で間違いを起こすなど人に忠告する。
 「付合」①前句から吹雪の趣を看取するとともに、自らを駄目にするような感じをも受け取って、②雪から酒の連想で、酒飲みの失態ということに想像が及び、③酒の諫言をする側もそこに酔っているとした。

「備考」 「酒の諫」は酒に関する忠告。「生酔」は少し酒に酔った人という場合と、相対に酔った人という場合があり、ここは泥酔ではないまでも相対に酔った者と見るのがよからう。「雪」と「酒」は一般的な連想関係（『類船集』に「雪↓酌酒」）で、「酒」と「諫」も同様（同じく「諫↓酒宴」）。

世中の直を江口が舟の棹

無倫

名才9 雑 名所・水辺体

「句意」世の中の直きことを象徴し、江口を往来する舟の棹も危なげない。
 「付合」①前句を五十歩百歩の行為と見て取り、②その皮肉な感じをいかそうと考えつつ、「諫」から「直」、酒から歡樂街を思い寄せ、③江口の遊女を目当てに舟がまっすぐやって来るのも、世間の正しさの現れであるとした。

「備考」 「直」は正しくまっすぐなことで、ここはチヨクと読めばよからう。

「江口」は現在の大阪市東淀川区の地名で、淀川から神崎川が分流する所にあり、西海と京を結ぶ河港として繁栄し、遊女の多いことでも知られた。遊

女妙が西行を諫めた故事（謡曲「江口」等）は著名であり、この付合の背景にもそのことがあると見てよからう。

孕むと尼になる御影堂

不角

名才10 雑 恋（孕む） 人倫・釈教

「句意」子を身ごもると尼の姿になって御影堂で暮らす。

「付合」①前句が江口を舞台にした点に着目し、②ここに暮らす遊女のありようを想像し、（江口↓尼崎↓尼）の連想も介して、その妊娠した場合を考え、③孕んだ女は一時的に尼となって御影堂に入るとした。

「備考」 「孕むと尼になる」に関して、『落窪物語』には希望せぬ懐妊で子をなした四の君の「わが身心憂し。尼にならむ」と嘆く場面があり、（懐妊↓出家）という発想にはある種の普遍性もあったことが知られる。ただし、ここは、望まぬ妊娠をして、身二つになるまでの間を尼の姿でやり過ごそうというのであろう。前句との関係で解すれば、それは江口の遊女に起きた出来事ということになり、そもそも、この「尼」の語は、「江口」から近隣の地名「尼崎」を介して（『類船集』に「江口↓尼が崎」）導かれたものと見られる。「御影堂」は寺院で開山・宗祖などの肖像を安置した堂のこと。

影きよめ月もこぼるゝ花石榴

我笑

名才11 夏五月（花石榴） 月の句 天象・夜分・植物木

「句意」月が清めようと放つ光を受け、石榴の花が美しく照り映えている。
 「付合」①前句の懐妊して尼になるという点に着目し、②悪鬼から仏教の守護神となった羅刹を想起しつつ、望まぬ妊娠という罪深さを清める景気句にしようと考え、③燃えるような石榴の花を清らかな月光が照らすとした。

「備考」 「きよめ」は「清め」で、「清影」は清らかな月光をさす語。ここは

その意もかすめながら、「影きよめ月もこぼるゝ」で、月の光が花石榴にこぼれかかつて、その花の姿を清めているというのであろう。一方、「こぼる」は色があふれ出るように美しく照り映えることをもさし、この意も掛けられている。「花石榴」はザクロ科の落葉小高木である栝榴（石榴）の花のことで、諸書に五月の扱ひ。その赤橙色の花弁は、燃えるようなと形容されるもの。また、『類船集』に「栝榴↓十羅刹」とあるのは、羅刹が元は人の血肉を食べる悪鬼であったことによるもので、羅刹女や鬼子母神（両者は合祀されることが多く、江戸にもそうした鬼子母神堂がいくつもあった）は仏に帰依する際、釈迦から人を食べずに栝榴を食べるよう勧められたとされる。

土籠の沈む播鉢の音

里風

名才12 雑 生類獣

〔句意〕播鉢を使う音に驚き、モグラが地中に沈んでいく。

〔付合〕①前句から静寂な夜のさまを感じ取り、②そうした中で物音がした場合の影響を考え、③播鉢の音を聞いたモグラはあわてて土にもぐるとした。

〔備考〕「土籠」はモグラ科に属する哺乳類の総称で、ムグラ・モグラ・ムグラモチ・ウグロモチなど種々の呼び方がある。地中での生活を基本とするため、目は退化しており、音や匂いに対して敏感に反応する。「播鉢」は味噌・胡麻などを入れ播粉木ですりつぶすための鉢。

法賀とよ証拠の弥陀に挙ル僧

不角

名ウ1 雑 釈教・人倫

〔句意〕阿弥陀に帰依する証拠に僧が挙げるのは、法賀とやらいうそうだ。

〔付合〕①前句がモグラの勘違いであった点に着目し、②それを一種の比喩と見て、迷妄の中をさまざま衆生へ想を翻して、怪しげな説法の間を思い描

き、③証拠の弥陀として法賀とやらを挙げている僧であるとした。

〔備考〕ものものしく仏教めいた詞を重ねた一句ながら、「法賀」は未詳で、「証拠の弥陀」も意味不明。案ずるに、これは、生半可な理解のままに説法する僧とその聴衆を詠んだものであろう。「法賀」は「法楽」「法悦」などに準じ、信仰がもたらす喜びの意と見ればよく（「賀」は冥加にも通じよう）、「証拠の弥陀」は「弥陀の証拠」（『往生要集』には「念仏証拠」とある）を逆にしたもので、阿弥陀如来を信仰して念仏を修する根拠の意と見れば足りる。わざと怪しげな語句・表現をひねり出して、理解の足りない僧や衆生のありようを示し、前句の「土籠」に変わらないとしたのである。

幕の物見も十二因縁

和英

名ウ2 雑 釈教

〔句意〕幕の物見穴から覗く世界は、これも十二因縁ということになる。

〔付合〕①前句を大道説法でのことと見定め、②近くには幕を張つての興行が並ぶと想定し、③十二因縁さながらの景が幕の穴の向こうにあるとした。

〔備考〕「幕の物見」はその向こうを覗き見るために幕にあけた穴で、『好色五人女』巻一ノ三に見える「幕の人見」も同一であろう。ここは見世物興行の幕をさすとおぼしく、前句の怪しげな説法僧に、これも怪しげな興行（因果による奇形と称したものを見せることが多い）を向かわせたのであろう。

「十二因縁」は釈尊が菩提樹下で悟ったとされる真理で、無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死の十二を生存の構成要件として立て、これらは因果的な連鎖関係にあるとしたもの。過去・現在・未来の三世を流浪する輪廻のありようも、この十二の因果関係によって説明される。

塊の積る所が佃島

里風

名ウ3 雑 名所・山類

〔句意〕砂か何かの固まりが積み重なってできた所が、佃島ということだ。

〔付合〕①前句で因縁ということが示された点に着目し、②何か奇瑞譚めかした一句を出そうと考え、③佃島は塊の寄り集まりなのだとした。

〔備考〕「佃島」は隅田川の河口にあつた小島（現在は埋め立てにより東京都中央区佃の一部を成す）。「塊の積る……」は諺「ちりつもつて山」のもじりで、佃島は砂州の陸化したものだから、ここでの「塊」は砂の固まりとなる。それを奇談風の語り口でまとめたところに、作者のねらいがあるう。一方、「固まり」は信仰心に固まった集団をもさすので、語と語のつながりという意味では、これが前句の「十二因縁」を受けるのかもしれない。

乞食こじきとしらし乳ちに育内そだつち

無倫

名ウ4 雑 人倫

〔句意〕乳を飲んで育つ幼少期に、自分が乞食になることなど知りはしない。

〔付合〕①前句の小が大になつたという点に目を付け、②ここから人間の成長ということに想を翻し、子どもには先の姿など自覚できないことに思いが至り、③乳児の身で自分が乞食になるなど知りはしないとされた。

〔備考〕「乳に育内」は乳を与えられて成育する期間。世襲を基本とする世の中であるから、育てている親も乞食の身としてよいのかもしれない。

此面このもか彼面かのも指さす花の相車あひくるま

和英

名ウ5 春三月（花） 花の句 植物木

〔句意〕こつちだあつちだと指さしながら、花見の車に同乗している。

〔付合〕①前句を今は乞食になつてゐる者の感慨と見換え、②花の定座であることも考慮して、その者が人出の多い花見の場にいることを想像しつつ、

これとは対照的に花を楽しむ人々を描こうと考え、③花見車の同行者とあちらこちらを指さしているとした。

〔備考〕「此面彼面」はあちらこちらの意。吉井美弥子氏の教示によると、『源氏物語』に三例の使用があり、こゝは「夕顔」巻の冒頭場面を踏まえた（「乳」から乳母を連想したか）可能性が高く、挙句の「藤」もその延長にあるうかとの由。とすれば、光源氏が牛車から粗末な家々を眺めたように、指をさすのは下々の生態への関心なのかもしれない。「相車」は誰かと一緒に乗車すること。花見の人手を当てるに乞食が喜捨を求める近くを、この一行は通つてるのであり、向付と見られる。

藤の下露したつゆ鷹に飼ふ也

我笑

挙句 春三月（藤） 植物木・生類鳥・降物

〔句意〕藤からしたたる露を鷹に飲ませて飼育することである。

〔付合〕①前句を武士など上流階級の花見と見込み、②そうした人の屋敷には藤や鷹小屋があると想像し、③藤の下露を与えて鷹を飼うのだとした。

〔備考〕「藤の下露」は藤の枝葉からしたたり落ちる露のこと、「藤」は諸書に三月の扱い。「飼ふ」は動物に餌や水を与えることで、さらにはそうして飼育することも意味する語。前句を上級武士の行為と見て、鷹狩のための鷹が飼育される、その邸内の様子を描いたものと見られる。

以上の分析から、次の二つのことが指摘できる。一つは、前句のことではなく、そこから想像される場面を表現しようとしたものが多く、その意味ではたしかに心付（句意付）が中心であるということ。もう一つは、それでも、詞から詞への連想が発想上の大きな部分を占めがちであるということ。

後者について補足すると、いわゆる詞付が付合語や連想される語句を組み

合わせて一句にすることであれば、この歌仙の場合、そうした単純な付け方はほとんど見られない。にもかかわらず、多くの付合で詞の縁の介在が指摘できることは、見てきた通りである。たとえば、脇や第三に見られるように、〈天↓海土↓雨〉という同音を利用した語の選択は、趣向の段階だけでなく、句作の段階にまで残ることがあるのであって、名才10・11で「影」の字が重用されるのも、句想にあたって同字を積極的に使ったということなのである。〈江口↓厄崎↓厄〉という連想によった名才9・10、〈笠↓早乙女・唐人〉の連想による名才3・4など、発想が詞に基づくことを示す付合は枚挙にいとまがないし、「篝火は炭に月も宵闇」(初ウ6)のように、「篝火↓月遅き夜」(『類船集』)の付合語を句作にそのままいかしたかと思われる例もある。やはり、この連衆にとつて、付ける際の何よりの手がかりは詞だったのであり、それを少し広げて言えば、作者たちはとくに①↓②の過程で知識に頼った発想をしがちなのであった、ということになる。

そして、ここでさらに問題とすべきは、そのような場合、②↓③の過程でひねりが加えられることは稀少で、ただその発想に依拠した句作になりがちだということである。『平家物語』に取材した「安德の入水萍の綾錦」(初ウ5)などがその典型例で、安德入水の件を思いついたことに満足し、そこに何らかの改変や工夫が入ることはなく、ただ故事そのままの句に終わっている。周知の通り、芭蕉晩年の連句では、句作段階で思い切った捨象や独特の具象化が目立ち、故事・古歌等を踏まえる際にも独自の発想の冴えが見られたのであり、無倫・不角らとの懸隔はここに認められなければならない。では、蕉風では詞に頼らない疎句の付合が志向されていた点も、この連衆には無縁のことであつたのだろうか。たとえば、「雪獅子の風をのれを吹破」／酒の諫を生酔のいふ(名才7／8)の場合、「雪↓酌酒」「諫↓酒宴」(『類船集』)といった連想語の介在はあるにしても、二句間の距離は大きく、前句から離れた付句となっていることに間違いはない。しかし、その句はどう

かというに、よくありがちな世事を観相風に表し、柳風狂句の先蹤とも言うべき一句となっていて、それはそれで興味深いことながら、二句を通して何かを表現しようという意識までは看取できない。一見、芭蕉流の疎句化と同一路線かと思える付合も、その内実は、前句に付けるよりも付句自体のおもしろみを優先して、一句立の方向に一步を踏み出すものだったのである。また、前句を一種のたとえと見て、それに対応した人事を探るというのも、この歌仙に見られる一つの傾向で、「土龍の沈む播鉢の音／法質とよ証拠の弥陀に挙ル僧」(名才12・名ウ1)などがその顕著な例となる。これも、たしかに親句ではないものの、二句による形象という点では疑問の余地があり、くり返されれば安易な手法ともなりかねない付け方と言える。改めて思えば、「前句は是こゝいかなる場、いかなる人と、其業そのわざ・其位そのゐを能見定め、前句をつきはなしてつくべし」(『去来抄』)という、芭蕉が元禄期に追究した付合手法は、想像力の駆使と詞を選び抜く努力を不可欠とするものであった。蕉門内でもその理解・実践にはばらつきがあつたのであるから、これを俳壇全般に求めること自体が、そもそも無理ということなのかもしれない。

結局、当該歌仙だけを俎上に乗せて見るならば、心付が主流であることは間違いなく、世相や人事をたくみにすくいとつて、興味深い内容を表していることに疑いはない。それでも、詞の連想に頼った面が少なからず見られるのも事実であり、芭蕉俳諧との比較という視点をここに持ち込むと、前句にふさわしい場面を想像し、位を重視して付けるという意識を見ることはできないのであった。これを敷衍して、芭蕉流と他派の違いはこの点にあると断言してよいのだろうか。それは今後の課題としたい。

佐藤 勝明(和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 教授)

(令和元年十一月十五日受理)